

啓蒙思想をたずねて

— フランス 一七七八年— 一九七八年

永治日出雄

(一)

ルソーが世を去ってちょうど二百年目の七月二日、私はセーヌ河近くの、ある地味な美術館にいた。この年はルソーと、さらにヴォルテールの没後二百年を記念して、ヨーロッパの諸国で様々な研究会や展示会が計画され、そうした行事の若干に参加することを主たる目的として、私もはじめて異国の地を踏んだのである。しかし、ルソーの命日にあたるこの日には、日曜のためか、特別の催しは見当らず、パリではルソーの植物採集に関する長期の展示会だけが、ここ裝飾美術館で開かれていた。

この夏は例年にならない冷温らしく、また連日のように雨に悩まされていたが、広い庭園を隔てて、彼方に位する宏壮なルーブル美術館の周辺は、そろそろ増しはじめた観光客の群で、大変な活気と混雑をみせていた。けれども、王侯貴族の家具や調度品を取めたこちらの美術館は、静かで人影も少なく、古風な屋根や柱廊に降りかかる雨が、侘しく感じられるほどだった。

ルソーについての資料は、奥まった小さな一室に陳列されていた。そこには晩年のルソーを表現したメエルの肖像画が置かれ、一方に杖を、他方に野草を持つ老人の姿が、淡い色調で描かれている。

また、展示された彼の植物採集帳を眺めると、右側の各頁には種々の草花が、細い紙片で入念に張られ、左側には几張面な字で、数行ずつ説明が書き綴られていた。この展示室には足を留める參觀者もほとんどなく、見まわりの館員が、所在なさそうにひとり立っている。私は簡単な言葉を彼と交わし、ここで発行された雑誌に、ルソーの植物採集帳の由来が記されているのを知った。

▲装飾美術中央協会▼一九七八年三月号の掲げる論述を追ってみる。ルソーにおいて、植物への愛着が、とくに顕著となるのは、一七六四年の前後かららしい。なによりも▲エミール▼の刊行を契機として、古い勢力による激しい非難と迫害に晒されるとともに、百科全書派への疑惑と不信をいっそう深め、孤独と逃亡の日々を重ねた時期である。ルソーはこうした植物への愛着を、死の直前まで抱き続け、数多くの採集帳を作成した。しかし、いまもシャリスの僧院やカルナバレ歴史博物館で眼にしうる若干を除き、それらのほとんどは散失したらしい。装飾美術館が有する植物採集帳は、二十世紀のはじめにランビュトオによって発見された。この遺品は驚くほど美事に保存され、明確に読める筆跡から判断すれば、ルソーの作品であることは疑いない。晩年の彼は、小型の採集帳を携帯用として好み、それらを親しい人にもわけ与えて、利用するように勧めた。ここに展示された作品は、そうした小型採集帳のひとつかもしれない。

この雑誌では、十八世紀に現われた草花への関心の典型として、ルソーの植物採集が説明されている。しかし、私は後日あらためて▲孤独なる散歩者の夢想▼の第七章を再読し、植物に対するルソーの愛着は、彼の生きかたや考えかたと密接につながっていることを感じた。この書物において彼は、薬学や工学など功利的な見地からではなく、なによりも自然それ自体の生と美を、観察し鑑賞するよう教えている。そして、自然との接触から生ずる、身近かで純粹な喜びと幸福に、大半の人々が鈍感であることこそ、まさに人類が価値のない世事と妄想に、あまりにも心を奪われている証拠にほかな

らない。地上の緑と花、澄んだ青い空、恋する羊飼や逞しい農夫を人々は追放し、鉄と煙と火の装置を、採石場と製鉄所を、蒼白な坑夫とどす黒い鉄工を造り出した、とルソーは糾弾するのである。

こうした近代工業や機械文明の憂うべき結果を、私はヨーロッパでの滞在において痛切に実感した。溢れるばかりの自動車もたらす混雑と喧騒は、パリでもジュネーブでも、ウィーンでもフィレンツェでも、はるかに予想を超えていた。しかも、これらの都会では、古くからの家屋街路や生活様式が数多く残され、日本の場合よりも、規制と秩序を確立することが困難であるらしい。こうしてルソーの生涯を跡づけていく旅のなかでも、彼が愛好したサン・ピエール島と終焉の地エルムノンヴィルにおいて、昔ながらの自然がいまも保たれていることに感動しつつ、空虚で人工的なパンテオンや観光化された騒々しいルソー島では、そこにまつられた彼の面影を、私は痛々しく眺めるほかなかったのである。

(11)

六月二十五日に成田を飛び立ち、ド・ゴール空港からパリへと単身でタクシーを走らせ、カルチェ・ラタンにある質素なホテルに着くまでの、息詰まる緊張と鼓動を、生涯にわたり私は忘れることがないであろう。そうした精神の高揚は、未知で孤独な世界に分け入りつつある怖れと、たんに言葉や映像でのみ知る事柄を、みずからの感性和行動により把握しはじめた喜びを伴っていた。旅客機の窓へ、緑豊かな国土が一気に接近した九時半には、まだ夕方を思わせる明るさであったが、セーヌ河にかかる堂々たる橋やコンシエージュリの異様な建築が現われる頃には、暗闇と照明が織りなすようになった。石造りの重厚な建物の連らなる街並、深更まで老若男女で賑やかな広場——こうしたパリの

情景こそ、まさしくバルザックの小説に描かれたとおり、貧しい画家や夢みる詩人が彷徨する都邑、投機師の貪欲な商魂と政治家の陰險な策略が渦巻く戦場にふさわしいものと映るのであった。

しかし、私はつぎの朝、宿近くにあるリュクサンブール公園の典雅な庭園を散歩して、やや落ち着いた気持ちにかえったあと、狭く暗い道路を抜けて、サン・ジェルマンの大通りに出、パリの新しい様相をはじめて認識した。この大道に並ぶ沢山のカフェや売店に、さてはまたダントンの銅像や地下鉄への階段の周辺に、あらゆる人種の交叉と雑踏を眺め、私は呆然と立ちつくしたのである。とくにアフリカ系と思われる男女の目立つことは衝撃的で、その後もパリでは清掃や工事や護衛などに従事する労働者のなかに、こうした人々を数多く見出した。確かにフランスへは、イタリアやスペインの失業者ばかりでなく、アルジェリア、モロッコ、チュニジアからの移民が、仕事と雇用を求めて、いまでも続々と流入しつつある。日が暮れると、郊外まで延びた地下鉄はこうした労働者で充満し、終点に近づくや、点々と建てられた団地風の住宅へと、彼らを吐き出すのである。

こうして私は、旅行者がほとんど語らなかつた深刻な実態に触れ、西欧の都市や市民が、日本の新聞や雑誌のなかで美化されていることを悟った。フランスの労働者はゆったりと昼食や休憩をとることができ、静かな環境で生活し、伝統ある文化を享受している——この種の紹介は、まったく誤りではないとしても、一面的であることを免れない。もしも生産にたずさわる人々が、歴史を進歩させる原動力であるならば、筋肉労働の過半を自身で担うことができず、他の民族に委ねている国民には、いかなる運命が前途に待ち構えるのであろうか。また、このような社会では、階級という概念も、祖国という概念も、新たな内包を帯びてくるのではないか。私はこれまで関心の薄かつた「第三世界」や「南北問題」についての論議を、先進諸国のむしろ国内問題として理解しはじめるとともに、フランスの底辺を支えるこうした移住労働者のなかから、どのような思想や文化が発展するであろうかと

考えた。

かつては「社会契約論」や「哲学書簡」により、労働する階層と自由を求める運動を鼓舞したルソーとヴォルテールを記念して、三日からセーヌ河畔で国際研究集会が開かれた。私はその春、偶然に企画を知り、個人的に出席の申込みをしていたが、こうした大会の手順や雰囲気については知識をもたなかった。しかし、少し遅れて会場に着くと、本部を担当する女性のひとり、私の名を刻印した資料入れを取りだし、歓迎の気持ちをこめて握手してくれた。黒い髪をもつこの美しい女性は、心細そうに日本人と察したらしく、それからときどき言葉をかけてくれた。パリでの集会の模様に関しては、別の学会誌にやや詳しく報告したので、繰返すことは遠慮したい。ただ、イギリスやスペインをはじめ、ソ連やポーランドからも発表者が参同した豊かな国際性と、哲学、歴史、医学、美術など多種の学芸にまたがる領域の幅広さは、私にとって驚きであり、きわめて魅力的でもあった。

けれども、そうした国際性も、サン・ジェルマンで受けた強烈な印象に比較すると、やはり現実的な重さと迫力に欠けていた。その集会の主要な課題のなかには、現代社会における啓蒙思想の意義を究明することが含まれていたが、日本人の数名を別として、アジア・アフリカからの研究者は、ひとりしか発見できなかった。彼が寡黙で孤独であったのは当然で、こうした状態は、私が接した他の文化的な会合でも、ほとんど同様であった。私はフランス人と移住外国人との間に、生活や教養の極端な格差が存することを知り、ますます憂うつな気持ちに陥っていった。同時にまた、国際研究集会においてしばしば出会った典雅で知的な婦人の面影の背後に、傾きつつある西洋文化の翳りが、幽かに映じているように感じたのである。

この会場で私が第一に会うことを望んだ人物は、パリ大学のA教授であった。一九六九年に複製されたエルヴェシウスの全集には、序文としてかなり長い論述が付せられているが、その執筆者として

A氏の名を覚えたのである。とはいへ、教授は今回の集会を共催した団体のひとつ、Aフランス十八世紀研究学会の会長であり、多忙なことと推察して、やっと私が話しかけたのは集会の最終日であった。渡欧するまえに送った手紙と論文を、A氏は記憶しておられ、翌朝に自宅で会うことを約束された。

その住いはリユクサンブル公園からほど遠からぬグルネル通りにあり、古風な建物の四階であった。教授は地方にも家をもっておられるとのことで、ここは主として仕事場であろうか。A氏はたどたどしい質問に應じて、フランスでもエルヴェシウスについての研究が少ないことを肯定された。しかし、教授はこの思想家に関する随一の研究者として、カナダのB氏の名を挙げ、まだ私の知らない論文のひとつを出してこられた。研究集会の直後でもあり、一時間ほどいとまを告げると、これからデイドロの文献研究で有名な、ハーバートのC氏と会う予定だと話された。教授は長身の逞しい体軀の持主であったが、すでに白髪で七十に近いらしく、大きな学会の長にふさわしい好々爺という印象が強かった。

私はエルヴェシウスを主題とする自分の論文をA教授に送っていたが、これに対する返事のなかに、日本の女子学生をひとり預っているの、あなたの論文を理解するのに彼女が助けとなるでしょう、と書かれてあった。私はしばらく後に、この女子学生であるD夫人と知り合い、パリ大学の様子やA教授の研究について、詳しく聞くことができた。彼女はすでに四年ほどフランスに滞在して、デカルトについての博士論文も仕上げの段階にあるらしい。D夫人の話によれば、教授はなによりもライヴニッツに関する独創的な業績で評価されているが、大変に視野が広く、また思想的に寛容であることから、若手研究者の間で信頼が厚い。彼はパリ大学第一部の哲学教授として最長老に位するが、エコール・ノルマル・シェペリウール出身のエリートには属さず、野人肌で、若いときに船乗りをした

経験もあるという。この人の作品のなかには、一冊の詩集も含まれ、最近は東洋の文化にも関心を寄せている。彼は日本の絵画や工芸品を愛するばかりでなく、日本酒や刺身も好きなのだ。このようにD夫人が尊敬と親愛の気持をこめて、師について語るのに、私は好感をもって耳を傾けた。そして、フランスの知識人にみられる東洋への関心や憧憬も、現代における西欧の混沌と模索に、深いかかわりがあるのではないかと心のなかで呟やいた。

帰国してから私は、広重が画く八東海道五十三次Vのささやかな複製を贈った。しばらくして届いたA教授の手紙にはつぎのように書かれていた。『これらの版画を私は驚嘆と哀愁をもって眺めています。今日ではこのような宿場や旅行はなくなりました。人々ははるかに便利で迅速な交通手段をもっていますが、余裕すなわち人間らしさを味わうことを忘れたのです。』

(三)

パリでの研究集会が終わると、私は国立図書館に通うことが多くなった。その建物はオペラ座やコメディ・フランセーズに近く、またアラモアの舞台にされたバレ・ロワイヤル広場のすぐ脇にある。資料を蒐集するには、まず国立図書館へ、とA教授をはじめ、幾人かの人達に勧められていたが、夏でも研究者で充滿する大閲覧室は、あまり快適な場所とはいえなかった。面倒な貸出の手續と粗悪な複写の設備が、不慣れな私を困惑させ、休憩室もない重苦しい館内が、神経の疲れを倍加する。ただ、この図書館の開架には、フランスの思想家や文学者の全集がずらりと並び、日本では遠くの大いに赴いて、やっと読むことのできるデイドロの八百科全書Vやグリュムの八文芸通信Vもそこに備えてあった。ちなみに、私がそれまでに接した何組かの八百科全書Vには、啓蒙の光を表現した有名な

扉絵が、なぜか欠落していたが、国立図書館に置かれた『百科全書』ではじめてそれを見ることができた。

この図書館で私になによりも見なかったのは、ルソーが所有していたエルヴェシウスの『精神論』である。一七五八年に『精神論』が刊行されると、ルソーはそこに述べられた唯物論的な主張に危険を感じ、反駁することに着手した。けれども、この著作のためにエルヴェシウスが宮廷と教会からの迫害に晒されたことを知り、ルソーは新たな攻撃を加えることを慎んで、批判の筆稿を焼き捨てたと言う。しかし、ルソーが友人に譲渡した書物のなかに、『精神論』の初版があり、そこにエルヴェシウスへの評言が書き込まれていることは、古くから伝わっていた。こうした『精神論』への書き込みについては、二十世紀のはじめにマッソンによって精密な分析が試みられ、私もルソーとエルヴェシウスの関係を主題とした論文のなかで、それを紹介したことがある。マッソンの分析は、『エミール』へと結実するルソーの思想の発展を明確にするとともに、草稿や覚書を検討することの重要性や、さらには文献学的な研究の面白さを、つぶさに私に教えたのであった。

貴重書を閲覧する特別室は、高い階の、分りにくい一角にあった。ルソーが所有していた『精神論』の初版は、きわめてよく保存され、大型の冊子の欄外には、彼らしい整然とした字体で、かなりの頁にわたって書き込みがあった。マッソンはこの筆跡を観察して、ルソーは少くとも二度にわたり『精神論』を精読した、と推理するのである。たしかに、黒いインクで綴られた書き込みは、色の濃さと線の太さから二つの種類に判別でき、相異なつた時期に記されたものと察せられる。この二種の筆跡は、章節を追って平行に点在し、個々に眺めると区別し難い場合もあるが、同一の頁に現われるさいには、両者の相違は明瞭に感じられた。

国立図書館から二丁ほどのところに、かつてエルヴェシウスが居を構えたサン・アンヌ通りがある。

有名なエルヴェシウス夫人のサロンが開かれ、啓蒙思想とフランス革命の拠点のひとつとなったのはここである。私は図書館でみつけたギロワの作品によって、この通りが革命の時期には、エルヴェシウス通りと改名されていたことを知った。しかし、この名称は一八一四年の王政復古とともに、ふたたびサン・アンヌ通りに変更された。政治的反動が、王権や教権と闘ったこの唯物論者の名を抹殺し、それが現在まで続いているのであろうか。パリに来てから、私はさまざま思想家や文学者にちなんだ地名を覚えると同時に、唯物論者の名を付したものが稀であることに気がついていた。デカルト通り、パスカル通り、ヴォルテール河岸、サン・シモン通り、オーギュスト通り、そしてディドロ大通りは存在するが、ガッサンディ通りも、ラ・メトリー通りも、ドルバック河岸も見出されないのである。

図書館の正門を出て、リシュリユー通りを左にすこし歩くと、古いビルの壁面に文字が刻まれ、その建物のなかでスタンダールが△赤と黒▽を執筆したことがわかる。しかし、サン・アンヌの細い通りには、エルヴェシウスが屋敷を置いた十八番地はなく、そうした歴史を表わす標示も見当らなかつた。この付近は美術品や装飾品などを扱う旧式な店が、いままも点々と残っているが、長い年月の間にやはり街並もかなり変わったのであろうか。ただ、目抜きのおペラ座大通りへと続くこの道路には、海外取引を得意とする日本のE銀行がある。したがって、革命の時期の地名がそのまま保たれておれば、エルヴェシウス通りはE銀行パリ支店の所在地として知られ、このブルジョア思想家の名は、貧しい研究者の間でよりも、まず日本の企業や資本家にとつて、親しいものとなったにちがいない。

図書館に帰って、私は革命直後のパリ市街図を見たいと思った。借り出したのは、ナポレオン一世のもとで一八〇八年に作成された地図であつて、詳細な図面を辿っていくと、サン・アンヌ通りに当たる場所はまさしくエルヴェシウス通りと印刷されていた。

パリから北に四〇キロほど行くと、古城と森で知られたシャンティイという町がある。ここでも△ジャン・ジャック・ルソーと現代における良心の危機▽と題して国際研究集会が催された。八月をスイスとイタリアで過ごした私は、再びフランスに戻って、この集会に出席した。会場と宿舎を兼ねたフォントレーヌ文化会館はジェズイット教団のものらしく、広大な森のなかに位置している。赤レンガの格式ある建物で、宗教的良心を覚醒するためか、個室にもまったく鍵がなかった。

パリでの研究集会が啓蒙運動を全体的に展望し、その歴史的系譜と社会的背景の解明に力点を置いたとすれば、ここでの大会はルソーの倫理思想や宗教思想の特質を究明し、その現代的意味を把握することを目的としていた。これらの集会への参加者からは、ルソーかヴォルテールか、どちらに興味を感じるか、としばしば質問された。その二人よりも、主として研究しているのは、エルヴェンシュウスマリヴォルテールの弟子であると私は返答する。この意外な言葉は、パリではときに質問者の関心をひき、ほかの研究者には私をエルヴェンシュウスの専門家だと紹介してくれることもあった。しかし、シャンティイに集まった人々は唯物論者にはほとんど興味がないらしく、代りに東京に置かれたジェズイット系の大学とその教授であるF氏のことが話題にのぼった。

その人には私も世話になり、いまでも感謝の気持ちをもっている。数年前に私は十八世紀の△トレヴー誌▽の複製が、その大学に備えられていることを知った。小さな図書室でその膨大な雑誌を調べていると、青い目をした品格ある老紳士が近寄って、あなたは△トレヴー誌▽に関心があるのか、と話しかけられた。百科全書派との関連で、と私が答えるや、別の部屋に案内され、小型である△トレヴー

誌Vの原本が、四千冊ほど並んでいるのを見た。書棚を指しつつ、老紳士はつぎのよりに言われた。『このジェズイット教団の名高い機関誌は、揃っていると素晴らしいが、欠けた号が多いので、私の価値が少ないのです。これらのなかで、もしあなたの欲しい号があれば、喜んで進呈しましょう。』こうして私はエルヴェシウスのA精神論Vの出版を論評したAトレヴー誌Vの第五十巻を所有することになった。私がおの日はじめて会った老紳士こそ、ほかならぬ主任のF教授なのである。

啓蒙思想が対決したキリスト教関係の文献は、そうした機関に多いことを私は知っている。フォンテーヌでも私は集会の会場を適当に抜け出し、文化会館に付設された図書室に入った。そこにはおなじくジェズイット教団が刊行したAトレヴー辞典Vが置かれていた。しかし、なんとよく似ていることだろう。書物の大きさも、活字の組み方も、あのA百科全書Vにそっくりではないか。ましてや本文までAトレヴー辞典Vから借用された個所があるとすれば、ジェズイットたちが剽窃と騒ぎ立てたのも無理はないと思つた。シヨームエの大部な書物もこの図書室ではじめて手にし、A百科全書VやA精神論Vへの攻撃を意図したものでありながら、ロックへの批判にもっとも多くを頁をあてていることに驚嘆した。

啓蒙思想の宿敵であつたジェズイット教団が、ルソーの記念行事を主催するのも奇妙なことである。しかし、この集会の最大の魅力は、周囲の素晴らしい環境であつた。深い堀に影を映ずるシャンティの古城は、フランスにおけるもっとも美しい城館のひとつである。第二日の夕には典雅な城内で、ルソーが作曲したいくつかの歌曲が演奏された。歌唱が終わるとレセプションがあり、食べものは期待ほどでなかつたが、上質のブドウ酒が提供された。

城館の内部は主として美術館になっている。ここに収められた作品では、ランブル兄弟の画いたAベリー公のいと豪華な時禱書Vが有名で、とくに四季各月を表現した最初の十二枚は、中世の農

民の仕事と生活を描写した傑作として知られる。その原物は保存のためシャンティイでも公開されていないが、きわめて精巧な複製があると出口で教えてくれた。海外では帰るまでの費用が心配で、とくに必要な書物のほかはなかなか買うことができない。イタリアの美術書もスイスの写真集も素晴らしいと感じつつ我慢したが、一三九の写本挿絵をもつこの複製本だけは、思い切って購入することとした。

シャンティイでの研究集会にも若干の日本人が参加し、家族とともに来られたG氏とはパリまで一緒に帰った。その人は以前にも長くフランスに留学し、啓蒙思想を専門とする気鋭の学者である。しかし、私たちが外国へ出張するさいのいろいろな障害をG氏は嘆かれた。観光旅行をする一般の人々には、渡航手続も簡単で、滞在計画も自由であるのに、他国の文化を研究している大学人には制約も厳しく、職場への気苦労も多い。西欧諸国間の自由な往き来を経験しただけに、こうした慨嘆にはまったく同感だった。

(五)

ヘーゲル研究で知られるH教授の自宅はポワチエにあった。九月に私はロワール河畔のトゥールに滞在し、ルソーゆかりのシュノンソーなど城めぐりをしていたが、ポワチエはそこからさらに百キロほど南に位置していた。この中世的な色彩の濃厚な古都は二つの丘陵に築かれ、狭い谷間を鉄道が走っている。観光化されたロワール地方の町々とは異なって、駅前の商店も少なく、静かな坂道と古めかしい建物が印象的だった。

H氏とは二ヶ月まえにいちど会っていた。名古屋哲学研究会のI教授から紹介して頂き、日本を出

発する直前に手紙を差上げていたが、フランスに着いて数日すると、カルチュ・ラタンのホテルに書き置きが入れてあった。このホテルはパリ大学にも近く、向側には進歩的な出版社も店を構えているので、ご自身がここに立寄られたのであろうか。教授はパリにも自分の住いを持たれ、夏休みには国立図書館などに通われることが多いと聞いていた。伝言のあったとおり、数日後にサン・ミッシェルの分り易いカフェで待っていると、雨のなかを夫人同伴で来られ、格調のあるレストランへと案内して頂いた。私が国際研究集会のプログラムを見せると、主催者や報告者の顔ぶれを興味深そうに辿られたあと、ルソー・ヴォルテールの記念切手が出たと言われて、紙入れのなかから一枚を分けて下さった。名古屋の研究会でしばしば噂を聞いたとおり、教授は大変に気さくで、心の暖かい方らしい。エルヴェシウスの屋敷がサン・アンヌ通りにあったことはご存知なかったが、彼の作品は非常に美しい文章で書かれていると称讃された。それは私がフランス人にじかに確かめたいと思っていた事柄であった。

ポワチエにあるH夫妻の家は丘陵の中腹に位し、展望の素晴らしいところに建てられていた。家屋そのものは大きくはないが、驚くほど広大な庭園には沢山の庭木や草花が植えてある。明るい応接室にはクリュニー美術館で見た一角獣と貴婦人のタピスリーの複製が掛けられていた。八月のすえに西独で世界哲学会が開かれ、そこで名古屋のI教授と一緒に話された。日本の研究者との交流は予想以上に多いようで、応接室にはそれらの人々から送られた東北の風鈴や会津塗の皿や京都の写真などが置いてある。しかし、教授には日本を訪れる気持は薄いらしく、極端に遠いことと、地震の多いことを理由として挙げられた。その夫人も気取りのない、親切な人で、手造りの菓子をお勧めながら、日本にいる私の家族のことを尋ねられた。

暑い日であったが、夕方になると、御夫妻は車で市内を案内して下さった。ヨーロッパのもっとも

古い大学に属するポワチエ大学と、H教授が実際の創立者と聞く同大学マルクスIIヘーゲル研究所は、古色蒼然とした街角にあった。この研究所が発行する論文集を私は何度か頂戴し、そこには教授がヴォルテールを論じた研究も含まれていた。

ポワチエはロマネスク探訪の拠点というが、市内にもいくつかの重要な史蹟が存在する。御夫妻に連れていかれたのは、ノートル・ダム・ラ・グランド教会であった。この建物は均斉の美しい正面がとくに有名らしく、暗く広い堂内に入ると、ほかに人影はなかった。この町で訪れたいまひとつの教会は、四世紀に造られたサン・ジャン礼拝堂である。ヴェネチアの離れ島で見た寺院とともに、それは今回の旅行で接したもっとも奇怪な教会であった。サン・ジャン礼拝堂は地面よりも低く、石と漆喰で穴倉のように築かれている。フランスで最古の教会とされるこの史蹟は、キリスト教が地下でひそかに信仰された時代を物語るのであらうか。ヨーロッパで見聞した中世の無教の遺産は、キリスト教の重みをあらためて実感させるとともに、なにかを信仰せずにはおれぬ人間の本性へと私の想いを沈潜させたのである。

帰り道で、H氏に言われるまま車を降り、遙かに崖下を見渡すと、淡緑のクラン川が流れ、低く開けた川岸にお伽の国のような村落が眺められた。御夫妻はこうした故郷の芸術と風土を愛し、幾度も人々を案内し説明されたにちがいがなかった。ポワチエを去るのは二十時の汽車の予定で、それを逃すと午前零時の便まで待つことになる。時間が早いため、まだレストランは開かれず、三人はセルフ・サービスの店で簡単に食事をするほかなかった。御夫妻は駅まで私を見送って下さった。

現在のフランスで、エルヴェシウスの専門家を私はひとりしか知らない。それはカーン大学のJ教授であつて、二十年ほどまえこの人の序文と註解を付した『精神論』の抜粹を入手したことが、私のエルヴェシウス研究の端緒となつた。J氏はパリにあるマルクス主義研究所（トレーズ研究所）の所長を兼ね、また政治活動でも重要な地位にあるため、大変に多忙らしい。その研究所は労働者層の多いオーギスト・ブランキ大通りに面し、門構えの立派な建物であつた。私が幾度もそこに足を運ぶと、秘書をつとめる感じのよい老婦人が、所長は忙しくてなかなかお目にかかれないが、あなたのことを聞いて喜んでゐる、と慰めてくれた。私への手紙もほとんどこの秘書が代筆し、彼女から私は教育問題を特集した研究所の紀要をもらつた。

こうして所長と会うことができたのは、ヨーロッパを離れる二日前であつた。J氏は長い闘争で鍛えられた精悍な風貌の老人で、不慣れな日本人を当惑させないよう、細かな配慮を示された。数年前に世を去つたジョルジュ・コニオの書物を読んでおり、その一部を私が和訳したこともあると述べる。と、J氏はコニオが研究所の創立者だと答えて、感慨ぶかそうな表情をされた。ワロンやロマン・ロランもこの研究所になんらかの關係をもつたらしい。J氏の前任者は日本でもよく知られた哲学者であるが、その辺には複雑な政治問題が潜むようで、私は口にするのを差し控えた。

エルヴェシウスの本格的な研究者としては、ソ連にはK氏、カナダにはB氏がいる。この人達は友人だから、いつでも紹介の勞をとろう、と所長は言い、二人の住所を書いて渡された。私がエルヴェシウスの著作の草稿について尋ねると、ほとんど残されていない、との答えだつた。彼の遺品が保存されたノルマンディ地方は、第二次大戦のときドイツ軍から多大の被害を受けた、と所長は説明される。『人間論』の初版の文章と、ルフェーブル・ラ・ロッシュェが譲り受けた最終の草稿との間には大きな相違がある。その草稿もまた失われたのであろうか、と私は当惑した。

しかし、私はI氏との会話から、エルヴェシウスが住んだヴォレの城館に、いまも子孫が暮らしていることを知った。所長はダンドローという綴りを書き、この人がエルヴェシウスの血筋にあたる女性と結婚しているのだ、と言われた。ダンドローには△ヴォレの領主、エルヴェシウス▽と題する著作があり、私はそれをジュネーヴのヴォルテール資料館で見つけ、複写をお願いしてきたばかりであった。エルヴェシウスには二人の娘がいて、ヴォレに住むのは次女の孫か曾孫のはずである。その領地はノルマンディにあり、J氏の大学の置かれたカーンからも遠くないところらしい。一八八〇年に△ヴォレ城への旅▽という著者名のない冊子が出されたが、その書物すら私は発見できないでいた。

エルヴェシウス夫人が絶世の美女であったことは、いろいろな文献のなかで伝えられている。この才色兼備の女性は、自分の夫が弾圧と迫害のため後退し、△精神論▽の書き直しを考えたととき、権力に屈服することに最後まで反対したのであった。そうした女性の子孫が存在することだけでも、ヴォレの城館は私を惹きつける魅力をもっている。そして、この情報を得たのが帰国する直前であることを、いかにも残念に感じた。

研究所を辞し、市内バスでカルチュ・ラタンに帰ると、夏中は人通りの少なかつた大学付近にいまや活気と気迫が戻っていた。十月のはじめであったが、リュクサンブル公園は黄金色に染まった並木と散歩道が美しかった。百日ほどまえあらゆる人種の喧騒で私を驚かしたサン・ジェルマン大通りには、ルソーやデイドロの出入りした老舗のレストランがある。権力と反動の牙城であるソルボンヌのこれほど近くで、彼らは自由と平等のための戦いを準備したのである。哲学者たちの肖像を掲げたこの店では、秋らしくすでに生ガキが料理のなかに含まれていた。それはノルマンディの海岸から運ばれるらしく、パリでもその地方へと通ずるサン・ラザール駅の周辺で食べるのがよいと聞く。海藻を敷き、氷で冷やされたカキを見つめながら、再びフランスに滞在するときには、かならずヴォレと

ノルマンデーを訪れようと私は考えた。

(ながや ひでお)

哲学と現代

4

第4号

〔座談会〕『経済学批判要綱』とマルクスの哲学	岸本 晴雄	21
認識論の現代的課題
△エッセイ▽
グラムシのふるさとで	島田 豊	40
啓蒙思想をたずねて	永治日出男	35
——フランス 一七七八年—一九七八年
デカルトにおける方法の理念とその基礎	山崎 広光	57
——『精神指導の規則』を中心に——
初期ヘーゲルにおける「反省」と「生命」	川口 茂也	78
△読書ノート▽
最近の価値論をめぐって	池谷 寿夫	93
——ヴェ・ハ・トウガリノフ『価値とは何か——マルクス主義の哲学的価値論——』を中心に——
蔵原惟人『宗教 その起源と役割』を読む	津田 雅夫	100
——宗教とマルクス主義の対話をめぐって——
編集後記・名古屋哲学研究会会則